美術科
評価の改善を目指して

指導と評価の両面で生徒の「思い」に寄り添う

ポイント1 育成を目指す資質・能力を生徒と共有する

美術科の目標は,「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成していくこと」です。その目標に迫るためには，それぞれの題材で育成を目指す資質・能力を明確にして，生徒と共有することが大切です。生徒に伝える際には，資質・能力を分かりやすく短い文にしたり，キーワードにしたりすることが効果的です。

育成を目指す資質･能力を意識して授業を進めることで，教師の声かけや見取りも変わってきます。授業の振り返りでも，「何の学習をしたか」だけでなく，「どのような力が付いたか」といった視点で振り返ることができるようにすることが重要です。

ポイント2 生徒のよさや可能性を見つけ，積極的に伝える

感性や情操といった生徒一人一人のよさや可能性については，個人内評価の対象で，観点別学習状況の評価の対象にはしないこととされています。しかし，これは評価をしなくてもよいということではありません。教師は個人内評価の部分についても積極的に見取り，生徒に伝えていくことが大切です。（これも大事な評価です。）

このことは全ての教科に当てはまりますが，教科の目標に「感性」や「情操」が含まれている美術科だからこそ，特に意識をしていきたいことです。日頃から生徒の学習の様子に目を配り，生徒の成長を捉えていきましょう。

ポイント3 生徒の資質・能力が最も発揮される場面で見取る

学習評価を生徒の学習改善と教師の指導改善につなげるためには，評価の時期や方法を工夫して，指導と評価の計画を立てることが大切です。特に，観点別学習状況の評価に用いる評価（記録に残す評価）の場面を精選しておくことで，評価の質を高めるとともに，教師の負担を減らす効果もあります。

全学年を一人で指導することの多い美術科では，効果的で効率的な評価を行うことが重要です。そのためにも，評価をする場面は，生徒がその資質・能力を最も発揮できる場面を選ぶようにしましょう。

２学年
「魅力を伝えるラベルデザイン」
デザイン・鑑賞

美術科実践事例

ミネラルウォーターのラベルのデザインを通して，伝達の効果と美しさなどとの調和を考えたり，自分の表現方法を創意工夫したりする。

評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知　形や色彩及びそれらが感情にもたらす効果，造形的な特徴などを基に，全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。 技　色鉛筆やパスなどの特性を生かし，意図に応じて自分の表現方法を創意工夫し，制作の順序などを総合的に考えながら，見通しをもって表している。	発　地域の魅力を伝えるために，伝える相手や内容，地域との関わりなどから主題を生み出し，伝達の効果と美しさなどとの調和を総合的に考え，表現の構想を練っている。 鑑　伝達のデザインの調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り，作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして，美意識を高め，見方や感じ方を深めている。	態表　美術の創造活動の喜びを味わい主体的にラベルのデザインに取り組もうとしている。 態鑑　美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品を鑑賞する学習活動に取り組もうとしている。 ポイント❶

題材の目標だけでなく，評価の観点や方法についても生徒と共有していくことで，授業のねらいが明確になり，評価の信頼性も高まります。

指導と評価の計画（６時間）

時間	学習内容	評価の観点 ○指導に生かす評価　◎記録に残す評価					評価の方法
		知識	技能	発想構想	鑑賞	態度	
1	生活の中で目にする既存のラベルデザインを鑑賞し，その目的や工夫を感じ取る。				○		
2	商品や地域の特性を考慮しながらコンセプトを決め，デザインを考える。	◎		○			
3	グループ内で自分の考えたデザインを発表する。			○			活動の様子
4	各グループの代表の作品の鑑賞を行い，デザインのよさや工夫を感じ取る。鑑賞を通して考えたことを基に，自分のデザインを再構成する。		○	◎	○		アイデアスケッチ
5	アイデアスケッチを確認・修正して発表の準備をする。		◎				活動の様子・アイデアスケッチ
6	ラベルデザインを発表し，互いに鑑賞する。				◎	◎	発言の内容・ワークシート

「主体的に学習に取り組む態度」は，各資質・能力が発揮される場面で，その資質・能力と一体的に見取ることが重要です。

ポイント❷ は，題材全体を通して意識をしていくことが大切です。

授業改善のポイント

○評価場面の精選

授業の前半では，生徒の学習改善のための評価（指導に生かす評価）に重点を置き，後半で記録に残す評価を実施した。記録に残す評価（◎）の場面を精選しておくことで，その時間に指導すべき内容も明確になった。ポイント❸

○ＩＣＴの活用

作品を発表する場面で，タブレット端末やプロジェクター等を使用した。撮影した作品の画像はそのまま端末に保存されるため，授業後の評価の材料としても活用できた。

【大型スクリーンに作品を映して発表する様子】

実践事例の詳細は右の QR コードから